

壳色鴨南蛮

泉鏡花

青空文庫

はじめ、目に着いたのは——ちと申兼ねるが、——とにかく、
 緋縮緬ひぢりめんであつた。その燃立つようなのに、朱でところどころ 処々とこ ぼかし
 の入つた長襦袢ながじゆばんで。女は裙すそを端折はしよつていたのではない。褌つまを高
 々と掲げて、膝で挟んだあたりから、紅くれないがしつとり垂れて、白い
 足くびを絡まとつたが、どうやら濡しよびれた不気味さに、そうして
 引上げたものらしい。素足に染まって、その紅あかいのが映りそうな
 のに、藤色の緒の重い厚ぼつたい駒下駄こまげた、泥まみれなのを、弱々
 と内輪に揃えて、股またを一つ振よじつた姿で、降ふりしきる雨の待合所の片

隅に、腰を掛けていたのである。

日永ひながの頃ゆえ、まだ暮くれかかるとまでもないが、やがて五時も過ぎた。場所は院線電車の万世橋まんせいばしの停車場じょうの、あの高い待合所であった。

柳はほんのりと萌もえ、花はふつくりと荅つぼんだ、昨日今日、緑、紅くれない、霞あせの紫、春のまさたけなわに闌たけなわならんとする気を籠こめて、色の濃く、力の強いほど、五月雨さみだれか何なにぞのような雨の灰汁あくに包まれては、景色も人も、神田川の小舟さえ、皆黒い中に、紅梅とも、緋桃とも言うまい、横しぶきに、血の滴るごとき紅木瓜べにぼけの、濡れつつぱつと咲いた風情は、見向うものの、面おもてのほてるばかり目覚しい。：

：

この目覚しいのを見て、話の主人公となつたのは、大学病院の内科に勤むる、学問と、手腕を世に知らるる、最近留学して帰朝した秦宗吉氏である。

へんぶく

辺幅を修めない、質素な人の、住居が芝の高輪にあるので、

毎日病院へ通うのに、この院線を使つて、お茶の水で下車して、あれから大学の所在地まで徒歩するのが習であつたが、五日も七日もこう降り続くと、どこの道もまるで泥海のようであるから、つとめにん
勤人が大路の往還の、茶なり黒なり背広で靴は、まったく大袈裟だけれど、狸が土舟という体がある。

秦氏も御多分に漏れず——もつとも色が白くて鼻筋の通つた処はむしろ兎の部に属してはいるが——歩行悩んで、今日は本郷ど

おりの電車を万世橋で下りて、例の、銅像を横に、おおき大な煉瓦を潜くぐつて、高い石段を昇った。……これだと、ちよつと歩行あるいただけで甲武線は東京の大中央を突抜けて、一息に品川へ……

が、それは段取だけの事サ、時間が時間だし、雨は降る……こではいりこも出入がさぞ籠むだろう、と思つたより夥おびただしい混雑で、ただ停車場などと、宿場がつて済すましてはおられぬ。川留かわどめか、火事のようわきたに湧立ち揉合もみあう群集の黒山。中野行を待つ右側も、品川の左側も、二重三重に人垣を造つて、線路の上まで押覆おつかぶさる。

すぐに電車が来た処で、どうせ一度では乗れはしまい。

宗吉はそう断念あきらめて、洋傘こうもりの雫しずくを切つて、軽く黒の外套がいとうの脇しごに挟みながら、薄い皮の手袋をスツと手首へ扱しごいて、割合に透

いて見える、なぜか、硝子^{がらす}囲^{がこい}の温室のような気のする、雨気^{あまけ}と人の香の、むつと籠^{こも}った待合^{うち}の裡へ、コツコツと——やはり泥になつた——侘^{わびし}い靴^{さき}の尖を刻んで入つた時、ふとその目覚しい処を見たのである。

たしか、中央の台に、まだ大^{おお}な箱火鉢^{おおき}が出ていた……そこで、ハタと打撞^{ぶつか}つたその縮緬^{ぶつめん}の炎から、急に瞳^{まなこ}を傍^{わき}へ外^そらして、横ざまにプラットフォームへ出ようとすると、戸口の柱に、ポンと出た、も一つ赤いもの。

威おどかしては不可いけない。何、黒山の中の赤帽で、そこに腕組をしつつ、うしろ向きに凭もたれ掛かかっていたが、宗吉が顔を出したのを、茶色のちよんぼり髻ひげを生はやした小白い横顔で、じろりと撓ためると、

「上りは停電……下りは故障です。」

と、人の顔さえ見れば、返事はこう言うものと極きめたようにほとんど機械的に言った。そして頸ぼん窪のくぼをその凭掛ひった柱で小突ついて、超然とした。

「ヘッ！ 上りは停電。」

「下りは故障だ。」

響ひびの応びずるがごとく、四五人口々に饒舌しゃべった。

「ああ、ああ、」

「堪^{たま}らねえなあ。」

「よく出来てら。」

「困^{つれ}ったわねえ。」と、つい釣込まれたかして、連^{つれ}もない女学生が猪首^{いくび}を縮^{つぶ}めて呺^やいた。

が、いずれも、今はじめて知^しったのでは無^なさそうで、赤帽^{あかぼう}がしかく機械^{きがい}的に言^いうのでも分^わる。

かかる群集^{ぐんしゅう}の動揺^{どうよ}む下に、冷然^{れいぜん}たる線路^{せんろ}は、日脚^{ひかく}に薄暗^{うすく}く沈^{しず}んで、いまに鯊^{はぜ}が釣^つれるから待^{まち}て、と大都市^{たいとふし}の泥海^{どろうみ}に、入江^{いりえ}のごとく彎^{わん}曲^{きよく}しつつ、伸^{のび}々と静^{しず}まり返^{かえ}つて、その癖^{くせ}底^{そこ}光^{ひかり}のする齒^はの土手^{どて}を見^みせて、冷^{あざ}笑^{わら}う。

赤帽^{あかぼう}の言葉^{ことば}を善意^{ぜんい}に解^とするにつ^つけても、いやしくも中山^{やまたか}高帽^{たかぼう}を

冠かぶつて、外套も服も身に添った、洋行がえりの大学教授が、端はしぢ近かへ押出して、その際したばたすべきではあるまい。

宗吉は——煙草たばこは喫のまないが——その火鉢そばの傍ひきこもへ引籠ひきこもろうとして、靴を返しながら、爪つまさき尖を見れば、ぐしよ濡ぬれの土間に、ちらちらとまた紅くれないの裊なが流れる。

緋鯉ひごいが躍ったようである。

思わず視線の向うのと、肩を合せて、その時、腰掛を立上った、もう一人の女がある。ちようど緋縮緬ひぢくめんのと並んでいた、そのつかとも思われる、大島の羽織を着た、丸鬚まるまげの、脊の高い、面長な、目鼻立のきつぱりした顔を見ると、宗吉は、あつと思つた。

再び、おや、と思つた。

と言うのは、このごろ忙しさに、不沙汰ふさたはしているが、知己ちかづき
 も知己、しかもその婚礼の席つらなに列つらなった、従弟いとこの細君いとこにそっくりで。
よな世馴れた人間だと、すぐに、「おお。」と声を掛けるほど、よく
 似ている。がその似ているのを驚いたのでもなければ、思い掛
 ず出会ったのを驚いたのでもない。まさしくその人と思うのが、
ちかぢか近々と顔を会わせながら、すつと外とらして窓から雨の空を視みた、
 取つても附けない、赤の他人らしい処置ぶり振ぶりに、一驚を吃きつしたので
 ある。

いや、全く他人に違ちがいがない。

けれども、脊せい恰か好こうから、形なり容かたち、生はえ際ぎわの少し乱れた処、

色白きりような容きりよう色きりようよしで、浅葱あさぎの手柄てがらが、いかにも似合う細君だが、

この女もまた不思議に浅葱の手柄で。鬢の色つぽい処から……それそれ、少し仰向あおむいている顔つき。他人が、ちよつと眉を顰ひそめるぐあい工合を、その細君は小鼻から口元に皺しわを寄せる癖がある。……それまでが、そのまま、電車を待草まちくたび臥れて、雨に侘わびしげな様子あからさまが、小鼻に寄せた皺に明白であつた。

勿論、別人とは納得しながら、うっかり口に出そうな挨拶こんにはを、唇で嚙留かみとめて、心着くと、いつの間にか、足もやや近づいて、帽子に手を掛けていた極きまりの悪さに、背を向けて立直ると、雲低く、下谷したや、神田の屋根一面、雨も霞も漲みなぎつて濁つた裡なかに、神田明神の森が見える。

と、緋縮緬の女が、同じ方を凝じつと視みていた。

鼻の隆たかいその顔が、ひたひたと横に寄つて、胸に白粉おしろいの着くように思つた。

宗吉は、愕然がくぜんとするまで、再び、似た人の面影をその女に発み見いだしたのである。

緋縮緬あざなの女は、櫛くし巻まきに結つて、黒縮緬くろしほの紋もん着つきの羽織はねおりを撫なで肩たにぞろりと着て、瘦やせた片手を、力のない襟えりに挿して、そうやって、引上げた褌つまをおさえるように、膝ひざに置いた手に萌黄色もえぎいろのオペラバッグを大事そうに持っている。もう三十を幾つも越した

年紀としごろから思うと、小児こどもの土産にする玩弄品おもちゃらしい、粗末てな手
 提さげを——大事そうに持っている。はきものも、襦袢じゆばんも、素足も、
 櫛巻も、紋着も、何となくちぐはぐな処へ、色白しろそうなのが濃い
 化粧、口の大きく見えるまで濡々ぬれぬれと紅べにをさして、細い頸えりの、真
 白な咽喉のどを長く、明神の森の遠見に、伸上のびあるような、ぐつと仰向
 いて、大きな目を凝じつと睜みはった顔は、首くびだけ活人形いきにんぎようを継ついだよ
 うで、綺麗きれいなよりは、もの凄すごい。ただ、美しく優しく、しかもき
 りりとしたのは類たぐいなきその眉まゆである。

眉は、宗吉の思う、忘れぬ女と寸分違わぬ。が、この似たのは、
 もう一人の丸鬚の方が、従弟の細君に似たほど、適格しつくりしたもの
 では決してない。あるいはそれが余りよく似たのに引込まれて、

心に刻んだ面影が緋縮緬の方に宿ったのであろうも知れぬ。

よし、眉の姿ただ一枚でも、秦宗吉の胸は、夢に三日月を呑んだように、きらりと尊く輝いて、時めいて躍ったのである。

——お千と言った、その女は、実に宗吉が十七の年紀としの生命いのちの親である。——

しかも場所は、まのあたり面か前しこ彼処に望む、神田明神の春の夜よの境内であつた。

「ああ……もう一呼吸ひといきで、剃刀かみそりで、……」

と、今視ながめても身の毛が悚立よだつ。……森のめぐりの雨雲は、陰惨な鼠色くまの隈を取つた可恐おそろしい面のようで、家々の棟は、瓦きばの牙を噛み、齒を重ねた、その上に一一ふたところ処、三三みところ処、赤煉瓦あかれんがの軒

と、トタン 亜鉛屋根の ひつぺがし 引剥が、高い空に、かつ 赫と赤い齒莖を剥いた、人を啖くう鬼の口に髻ほうふつ髻する。……その森、その樹立こたちは、……春雨の煙けふるとばかり見る目には、三ツ五ツ縦に並べた薄紫の眉刷毛まゆばけであろう。死のうとした身の、その時を思えば、それも逆さかしまに生えた蓬おどろおどろ々ひげの髻である。

その空へ、すらすらと雁かりがねのように浮く、緋縮緬ひぢくめんの女の眉よ！
瞳すわも据すわつて、瞬まばたきもしないで、恍うっとり惚とと同じ処ところを凝視みつめているのを、宗吉はまたちらりと見た。

ああその女？

と波なみを打うつて轟とどろく胸むねに、この停車場ていじやうばは、大おおなる船ふねの甲板こうばんの廻まわるように、舳みよしを明神みんじんの森もりに向けた。

手に取るばかりなお近い。

「なぞえに低くなつた、あそこが明神坂だな。」

その右側の露路の突当りの家で。……

——死のうとした日の朝——宗吉は、年紀上としうえの渠かれの友達に、顔を剃あつてもらつた。……その夜よ、明神の境内で、アワヤ咽喉のんどに擬したのはその剃刀であるが。

(ちよつと順序を附つけよう。)

宗吉は学資もなしに、無鉄砲に国を出て、行ゆきどころ 処ところのなさに、その頃、ある一団の、取留めのない不体裁なその日ぐらしの人たちの世話になつて、辛うじて雨露うろを凌しのいでいた。

その人たちというのは、主に懶惰らんだ、放蕩ほうとうのため、世に見棄て

られた医学生にようぼうもちの落第なかまで、年輩も相応、女房持なども交まじった。中には政治家の半端もあるし、実業家の下積、山師も居たし、真面目まじめに巡査になろうかというのもあつた。

そこで、宗吉が当時寝泊りをしていたのは、同じ明神坂の片側長屋の一軒で、ここには食うや食わずの医学生あがりの、松田と云うのが夫婦で居た。

その突当りの、柳の樹に、軒燈の掛つた見晴みはらしのいい誰かの妾し宅ようたくの貸間に居た、露の垂れそうな綺麗なのが……ここに緋縮緬の女が似たと思う、そのお千さんである。

お千は、世を忍び、人目を憚はばる女であつた。宗吉が世話になる、
 渠等かれらなかまの、ほとんど首領とも言うべき、熊沢という、追おって大
 実業家となると聞いた、絵に描いた化地蔵ばけじぞうのような大漢おおおとこが、
 そんじよその辺のを落籍ひかしたとは表向おもてむき、得心させて、連出し
 て、内証で囲つていたのであるから。

言うまでもなく商売人くろうとだけれど、芸妓げいしやだか、遊女おいらんだか——
 それは今において分らない——何しろ、宗吉には三ツ四ツ、もつ
 とかと思う年紀上の綺麗な姉さん、婀娜あだなお千さんだったのであ
 る。

前夜まで——唯ただいま今のような、じとじと降ふりの雨だったのが、花

の開くように霽あがった、彼岸前あさはんまえの日曜の朝、宗吉は朝飯前……とい
 うが、やがて、十時。……ここは、ひもじい経験のない読者に
 も御推読を願つておく。が、いつになつてもその朝の御飯はな
 かつた。

妾宅では、前の晩、宵に一度、てんどんのお逃あつらえ、夜中一時頃
 に蕎麦そばの出前が、芬ぶんと枕まくらもと頭あたまを匂におつて露路を入つたことを知
 ているので、行ゆけば何かあるだろう……：：
 い。空腹すきばらを抱かかいて、げっそりと落込おちこむように、溝みぞの減ひつた裏長
 屋の格子戸を開けた処へ、突当りの妾宅の柳の下から、ぞろぞろ
 と長閑のどかそうに三人出た。

肩幅の広いのが、薄汚れた黄八丈の書生羽織を、ぞろりと着た

のは、この長屋の主人で。一度戸口へ引込んだ宗吉を横目で見ると、小指を出して、

「どうした。」

と小声で言った。

「まだ、お寝つてです。」

起きるのに張合がなくて、細君の、まだ裸体で柏餅に包ま
 っているのを、そう言うのと、主人はちよつと舌を出して黙つて行
 く。

次のは、剃りたての頭の青々とした綺麗な出家。細面の色
 の白いのが、鼠の法衣下の上へ、黒縮緬の五紋、——お千
 さんのだ、振の紅い——羽織を着ていた。昨夜、この露路に入つ

た時は、紫の輪袈裟わげさを雲のごとく尊まく絡とつて、水晶の数珠じゆずを提たげたのに。――

と、うしろから、拳固げんこで、前の円い頭をコツンと敲たたく真似して、宗吉を流ながしめ眇めで、ニヤリとして続いたのは、頭毛かみのけの真中まんなかに皿はげに似た秃はげのある、色の黒い、目の窪くぼんだ、口の大おおき男おとこで、近頃まで政治家だったが、翻ひんつて商業に志した、ために紋着もんつきを脱いで、綿銘仙の羽織ゆきみじかを袴はかま短みじかに、めりやすの股引ももひきを瘦脚やせがねに穿はいている。……小皿の平四郎。

いずれも、花骨牌はちはちで徹夜の今、明神坂の常盤湯ときわゆへ行つたのである。

行違いに、ぼんやりと、宗吉が妾宅へ入ると、食う物どころか、

いきなり跡始末の掃除をさせられた。

「済まないことね、学生さんに働かしちやあ。」

とお千さんは、伊達巻一つの艶えんな蹴出けだしで、お召の重衣かさねの裾すそをぞろりと引いて、黒天鵝絨くろびろうどの座蒲団ざぶとんを持って、火鉢の前を遁にげながらそう言った。

「何、目下あつしは私たちの小僧です。」

と、甘谷あまやという横よこ肥ぶとり、でぶでぶと脊せの低い、ばらりと髪を長くした、太鼓腹に角帯を巻いて、前掛まえかけの真田さなだをちよきんと結んだ、これも医学の落第生。追って大実業家たらんとする準備中なのが、笑いながら言ったのである。

二人が、この妾宅めかけの貸ぬしのお妾——が、もういい加減な中婆

さん——と兼帯に使う、次の室^まへ立った間に、宗吉が、ひよろひよろして、時々浅ましく下腹をぐつと泣かせながら、とにかく、きれいに掃出すと、

「御苦労々々。」

と、調子づいて、

「さあ、^{あなた}貴女。」

と、甘谷が座蒲団を引攫^{ひっさら}って、もとの処へ。……身体^{からだ}に似た

い腰の軽い男。……もつとも甘谷も、つい十日ばかり前までは、

宗吉と同じ長屋に貸蒲団の一ツ夜着^{よぎ}で、芋虫ごろごろしていた処

——事業の運動に外出^{そとで}がちの熊沢旦那が、お千さんの見張兼番人

かたがた妾宅の方へ引取って置くのであるから、日蔭ものでもお

千は御主人。このくらいな事は当然で。

対ついでの蒲団を、とんとんと小形の長火鉢の内側へ直して、

「さ、さ、貴女。」

と自分は退のいて、

「いざまず……これへ。」と口も気もともに軽い、が、起居たちいが石い臼しうすを引摺ひきざるように、どしどしする。——ああ、無理はない、脚か気つげがある。夜あかしはしても、朝湯には行けないのである。

「可いや厭やですことねえ。」

と、婀娜な目で、襖ふすま際まぎわから覗のぞくように、友染の裾すそを曳ひいた

櫛卷の立姿。

五

桜にはちと早い、木瓜ぼけか、何やら、枝ながら障子に映る花の影に、ほんのりと日南ひなたの薫かおりが添って、お千がもとの座に着いた。

向うには、旦那の熊沢が、上下大島の金鎖、あの大々したので、ドカリと胡坐あぐらを組むのであろう。

「お留守ですか。」

宗吉が何となく甘谷に言った。ここにも見えず、湯に行つた中にも居なかつた。その熊沢を訊きいたのである。

縁側の片隅で、

「えへん！」と屋鳴りのするような咳せき払ばらいを響かせた、便所の

裡なかで。

「熊沢はここに居おるぞう。」

「まあ。」

「随分ですこと、ほほほ。」

と家いえぬし主のお妾が、次の室まを台所とおりへ通とがかりに笑ゆって行くと、

お千ちさんが俯うつむ向むいて、莞にっこり爾りして、

「余あんまり色いろ氣きがななさ過あぎるわ。」

「そこが御婦人ごふじんの毒どくでげす。」

と甘谷あまやは前掛まへかをポンポンと敲たたいて、

「お千ちさんは大将だいじやうのあすこん処ところへ落おッこちたんだ。」

「あら、随分ひど……酷ひどいじゃありませんか、甘谷あまやさん、余あんまりだよ。」

何にも知らない宗吉にも、この間違は直ぐ分つた、汚いに相違ない。

「いやあ、これは、失敗、失敬、失礼。」

甘谷は立続けに叩頭おじぎをして、

「そこで、おわびに、一つ貴女の顔を剃あらして頂きやしよう。いえ、自慢じゃありませんがね、昨夜ゆうべツから申す通り、野郎ずうたい凶体けうたいは不器用でも、勝かつ奴やつこぐらいにや確たしかに使つかえます。剃かみ刀そりを持もちしちや確たしかです。——秦君、ちよつと奥へ行つて、剃刀を借りて来たまえ。」

宗吉は、お千さんの、湯にだけは密そつと行つても、床屋へは行ゆけもせず、呼ぶのも慎むべき境遇うなずを領うなずきながら、お妾に剃刀を借り

て戻る。……

「おっと！……ついにてにかなだら金らい盥……気を利かして、気を利かして。」

この間に、いま何か話があつたと見える。

「さあ、君、ここへ顔を出したり、一つ手際を御覧に入れないや、奥さん御信用下さらない。」

「いいえ、そうじゃありませんけれどもね、私まだ、そんなでもないんですから。」

「何、御遠慮にやあ及びません。間違つた処でたかが小僧の顔でさ。……ちようど、ほら、むく毛が生えて、あんこ餛子のつまみぐい撮食をし
たようだ。」

宗吉は、可憐あわれやゴクリと唾つを呑んだ。

「仰向あやいて、ぐつと。そら、どうです、つるつるのつるつると、鮮あざかなもんでげしよう。」

「何あぶなだか危あぶなツかしいわね。」

と少し膝を浮かしながら、手元を覗のぞいて憂きづ慮かわしそうに、動うごかす顔が、鉄瓶の湯気の陽かげ炎ろうに薄絹を掛かけつつ、宗吉の目に、ちらちら、ちらちら。

「大丈夫、それこの通り、ちよいちよいの、ちよいちよいと、」
「あれ、止よして頂戴、止してよ。」

と浮かした膝を揺ら揺らと、袖が薰かつて伸上る。

「なぜですてば。」

「危いわ、危いわ。おとなしい、その優しい眉毛を、まみえ落したらどうしましよう。」

「その事ですかい。」

と、ちよつと留めた剃刀をまた当てた。

「構やしません。」

「あれ、目の縁はまだしもよ、上は止して、後生だから。」

「貴女の襟脚を剃すろうてんだ。何、こんなものぐらい。」

「ああ、ああああ、あーッ。」

と便所の裡で屋根へ投げた、筒抜けなおおあくび大欠伸。

「笑つちやあ……不可いけない不可い。」

「ははははは、笑つたつて泣いたつて、何、こんな小僧ツ子の眉ま」

毛ゆげなんか。」

「厭いや、厭いや、厭いや。」

と支つきひざ膝ひざのまま、するすると寄よる衣きぬ摺ずれが、遠くから羽衣ういの音ねの近ちかづくように宗吉むねきちの胸むねに響こいた……暈かげの波なみに人魚にんぎょの半はん身み。

「どんな母おつかさんでしょう、このお方かた。」

雪ゆきを欺かく腕かひなを空そらに、甘谷あまやの剃刀かみばさみの手てを支さえ、突ついて離はなして、胸むねへ、抱かかくようにして熟じつと視みた。

「羨うらやましい事こと、まあ、何なにて、いい眉まみえ毛えだろう。親御おやはさぞ、お可愛かわいいいだろうねえ。」

乳ちちも白しろ々と、優やさしさと可なつか懐かしさが透す通とおるように視みえながら、衣きぬの綾あやも衣えもん紋もんの色いろも、黒くろ髪かみも、宗吉むねきちの目めの真ま暗くらになつた時とき、肩かたに

袖をば掛けられて、面を襟に伏せながら、忍び兼ねた胸を絞って、
思わず、ほろほろと熱い涙。

お妾が次の室から、

「切れますか剃刀は……あわせに遣ろう遣ろうと思いましちやあ
……ついね……」

自殺をするのに、宗吉は、床屋に持って行きましょう、と言っ
て、この剃刀を取って出た。それは同じ日の夜に入ってからであ
る。

仔細は……

六

……さて、やがて朝湯から三人が戻つて来ると、長いこと便所に居た熊沢も一座で、また花札を弄ぶ事もてあそになつて、朝飯は鮓すしにして、湯豆腐でちよつと一杯、と言う。

この使つかのついでに、明神の石坂、開化楼裏の、あの切立きつたての段を下りた宮本町の横小路に、相馬煎餅そうませんべい——塩煎餅の、焼方の、醬油ししたじの斑ふに、何となく轡くつわの形の浮出して見える名物がある。——茶受にしよう、是非お千さんにも食べさしたいと、甘谷の発議。で、宗吉がこれを買ひに遣られたのが事おこりの原因であつた。

何分にも、十六七の食盛くいざかりが、毎日々々、三度の食事にかつ

がつしていた処へ、朝飯前とたとえにも言うのが、突落されるように嶮けわしい石段を下りたドン底の空腹ひもじさ。……天麩羅てんぷらとも、蕎麦そばとも、焼芋とも、芬ぶんと塩煎餅こうばの香しさがコンガリと鼻を突いて、袋を持った手がガチガチと震う。近ちかがつ飢えに、冷い汗が垂たらたら々と身うちに流れる堪え難さ。

その時分の物価で、……忘れもしない七銭が煎餅の可なり嵩かさのある中から……小判のごとく、数二枚。

宗吉は、一ひとさか坂戻つて、段々にちよつと区劃くぎりのある、すぐに手を立てたように石坂がまた急になる、平面な処で、銀杏いちようの葉はまだ浅し、椛もみ、榎えのきの梢さえずえは遠し、楯たてに取るべき蔭もなしに、畦がけの溝ど端ふばたに真俯まうつむ向けになつて、生れてはじめて、許されない禁断このみの果

を、相馬の名に負う、轡をガリリと頬張る思いで、馬の口にかぶりついた。が、甘さと切なさうまと恥かしさに、堅くなつた胸は、自おのずから溝の上へのめつて、折れて、煎餅は口よりもかえつて胃の中でボリボリと破れた。

ト突つぎだし出た廂ひさしに額を打たれ、忍しのびがえし返の釘に眼を刺され、赫かつと血とともに総そうしん身が熱く、たちまち、罪ある蛇になつて、攀よじ上る石段は、お七が火の見を駆上つた思いがして、頭こうべに映さす太陽は、血の色して段に流れた。

宗吉はかくてまた明神の御手洗みたらしに、更に、氷とじに閑とじらるる思いして、悚然ぞつと寒気を感じたのである。

「くすくす、くすくす。」

花骨牌はちはちの車座くるまざの、輪わに身を捲まかるる、危あやうさを感じながら、宗吉が我知らず面おもてを赤めて、煎餅せんぺいの袋ふくろを渡したのは、甘谷の手で。

「おっと来た、めしあがれ。」

と一枚めくって合せながら、袋をお千さんの手に渡すと、これは少々疲れた風情で、なかまへは入らぬらしい。火鉢ひばちを隔へてたのが請取まがって、膝ひざで覗のぞくようにして開けて、

「御馳走様ごちそうさまですね……早速さつそくお毒見どくみ。」

と言いった。

これにまた胸むねが痛いたんだ。だけなら、まださほどまでの仔細しじゆはなかつた。

「くすくす、くすくす。」

宗吉がこの座敷へ入りしなに、もうその忍び笑いの声が耳に附いたのであるが、この時、お千さんの一枚撮つまんだ煎餅を、見ないように、ちよつと傍わきへかわした宗吉の顔に、横から打撞ぶつかつたのは小皿の平四郎。……頬骨の張つた菱形つらの面に、窪くぼんだ目を細く、小鼻をしかめて、

「くすくす。」

とまた遣つた。手にわるさに落ちたと見えて札は持たず、鍍金めっきの銀煙管ぎんぎせるを構えながら、めりやすの股ももひき引を前はだけに、片膝を立てていたのが、その膝頭に頬骨をたたき着けるようにして、

「くすくすくす。」

続けて忍び笑わらいをしたのである。

立たてつ続けて、

「くツくツくツ。」

七

「こつちは、びきを泣かせてやれか。」

と黄八丈が骨牌ふだめくを捲ると、黒縮緬の坊さんが、紅あかい裏ひらりを翻ひらり然りと翻かえして、

「餓鬼め。」

と投げた。

「うふ、うふ、うふ。」と平四郎の忍び笑が、齒茎もを洩もれて声に

出る。

「うふふ、うふふ、うふふふふふ。」

「何じやい。」と片手に猪口ちよくを取りながら、黒天鵝絨くろびろうどの蒲団ふとんの上

に、萩あやめ、菖蒲あやめ、桜ぼたん、牡丹ぼたんの合戦を、どろんとした目で見据えてい

た、大島揃おおしまぞろい、大胡坐おおあぐらの熊沢が、ぎよろりと平四郎を見向い

て言うのと、笑いの虫は蕃とうがらし椒とうがらしを食ったように、赤くなるまで赫かつ

と競勢きおつて、

「うはははは、うふふ、うふふ。うふふ。えッ、いや、あ、あ、

ち、あははははは、はッはッはッはッ、テ、ウ、えッ、えッ、え

ッ、えへへ、うふふ、あはあはあは、あは、あははははは、あ

ははははは。」

「馬鹿な。」

と唇を横舐めずつて、熊沢がぬつと突出した猪口に、酌をしよ
うとして、銅壺から抜きかけた銚子の手を留め、お千さんが、
「どうしたの。」

「おほほ、や、お尋ねでは恐入るが、あはは、テ、えッ。えへ、
えへへ、う、う、ちえッ、堪らない。あッはッはッはッ。」

「魔が魅したようだ。」

甘谷が呆れて呟く、……と寂然となる。
寂寞となると、笑ばかりが、

「ちやはははは、う、はは、うふ、へへ、ははは、えへへへへ、
えッへ、へへ、あははは、うは、うは、うはは。どッこい、ええ、

チ、ちやはは、エ、はははは、ははははは、うツ、うツ、えへツ
 へツへツ。」

と横のめりに平四郎、煙管の雁首がんくびで脾腹ひばらを突ついて、身悶みもたえし
 て、

「くツ、苦しい……うツ、うツ、うツふふふ、チ、うツ、ううう
 う苦しい。ああ、切ない、あはははは、あはツはツはツ、おお、
 コ、こいつは、あはは、ちやはは、テ、チ、たツたツ堪らん。は
 はは。」

と込上げ揉も立て、真赤まつかになつた、七顛八倒てんとうの息継いきつぎに、つぎ冷さま
 しの茶を取つて、がぶりと遣ると、

「わツ。」と咽むせて、灰吹を掴つかんだが間に合わず、火入の灰へぶ

ツと吐くと、むらむらと灰かぐら。

「ああ、あの児こ、障子を一枚開けていな。」

と黒縮緬の袖で払って出家が言った。

宗吉は針の筵むしろを飛上るように、そのもう一枚、肘懸窓ひじかけまどの障子

を開けると、颯さつと出る灰の吹雪は、すツと蒼空あおぞらに渡つて、遙はるかに

品川の海に消えた。が、蔵前の煙突も、十二階も、睫毛まつげに一眸ひとめの

北かたの方、目の下、一雪崩ひとなだれに崖がけになつて、崖下の、ごみごみした

屋根を隔てて、日南ひなたの煎餅屋の小さな店が、油障子も覗かれる。

ト斜ななめに、がツくりと窪くぼんで暗い、崖と石垣の間の、遠く明神の

裏の石段に続くのが、大蜈蚣おおむかでのように胸前むなさきに畝うねつて、突当り

に牙きばを噛かみ合うごとき、小さな黒堀かみの忍がえしび返の下に、溝どぶから這はい上あが

った蛆うじの、醜い汚い筋をぶるぶると震わせながら、麩ふを嘗なめるよ
うな形が、歴然ありありと、自分おのが瞳に映った時、宗吉はもはや蒼白まつさお
になった。

ここから認みられたに相違ない。

と思う平四郎は、涎よだれと一所に、濡らした膝を、手巾ハンケチで横撫で
しつつ、

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ。……大歎息おおためいきとともに尻しりを曳ひいたなご
りの笑わらいが、更に、がらがらと雷の鳴返すごとく少年の耳を打
つ！……

「お煎せんをめしあがれな。」

目の下の岨きつたが切立きつたてだったら、宗吉は、お千さんのその声とと

もに、倒さかしまに落ちてその場で五体を微塵みじんにしたろう。

産うみの親を可懐なつかしむまで、眉ひとひらの一片かばを庇かばつてくれた、その人ばかりに恥かしい。……

「ちよつと、宅うちまで。」

と息を呑んで言った——宅とは露路のその長屋で。

宗吉は、しかし、その長屋の前さえ、遁にげ隠かくれするように素通りして、明神の境内のあなたこなた、人目の隙すきの隅々に立って、飢うえさえ忘れて、半日を泣いて泣きくらしした。

星も曇った暗よき夜に、

「おかみさん——床屋へ剃刀を持って参りましょう。ついでがございますから……」

宗吉はわざと格子戸をそれて、蚯蚓みみずの這うように台所から、密そつと妾宅へおとずれて、家主の手から剃刀を取った。

間まを隔てた座敷に、艶あでやかな影が氣勢けはいに映つて、香水かおりの薫かは、つとはしり下もとにも薫かつた。が、寂寞ひっそりしていた。

露路の長屋の赤い燈あかりに、珍しく、大入道やら、五分刈やら、中にも小皿かむろで禿かむろなる影法師が動いて、ひそひそと声の漏れるのが、目を忍び、音ねを憚はばかる出入りには、宗吉のために、むしろ僣さいわい倖わいだつたのである。

「何をするんですよ、何をするんですよ、お前さん、串戯じようだんではありません。」

社殿の裏なる、空茶店あきちやみせの葦簀よしずの中で、一方の柱に使った片隅なる大木の銀杏いちようの幹よりかかに凭掛よりかかつて、アワヤ剃刀を咽喉のどに当てた時、すツと音して、滝縞たきしまの袖で抱いたお千さんの姿は、……宗吉の目に、高い樹の梢さつから颯さつと下りた、美しい女の顔した不思議な鳥のように映った——

剃刀をもぎ取られて後は、茫然ぼうぜんとして、ほとんど夢心地である。

「まあ！ 可よかった。」

と、身を捻ねじて、肩を抱きつつ、社やしろの方を片手拝みに、

「虫が知らしたんだわね。いま、お前さんが台所で、剃刀を持って行くつて声が聞えたでしょう、ドキリとしたのよ。……秦さん秦さんと言ったけれど、もう居ないでしょう。何だかね、こんな間違がありそうな気がしてならない、私。私、でね、すぐに後から駆出したのさ。でも、どこつて当^{あて}はないんだもの、鳥居前のあすこの床屋で聞いてみたの。まあね、……まるでお見えなさらないと言うじやあないの。しまった、と思つたわ。半分夢中で、それでも私がここへ来たのは神^{かみほとけ} 仏のお助けです。秦さん、私が助けるんだと思つちやあ不可^{いけな}い。可^ようござんすか、可^いいかえ、貴^あ方^{なた}……親御さんが影身に添つていなさるんですよ。可^{よう}ござんすか、分りましたか。」

と小児こどものように、柔い胸に、帯も扱しご帯もひつたりと抱き締めて、

「御覧なさい、お月様が、あれ、仏の様が。」

忘れはしない、半輪の五日の月が黒雲を下りるように、莊嚴なる銀杏の枝に、梢さがりに掛かつたのが、可な懐い亡なき母の乳房の輪線の面影した。

「まあ、これからという、……女にしても蕾つぼみのいま、どうして死のうなんてしたんですよ。——私に……私……ええ、それが私に恥かしくって、——」

その乳ちの震ふるえが胸に響く。

「何の塩煎餅の二枚ぐらい、貴方が掏ち賊ぼでも構やしない——私はね、あの。……まあ、とにかく、内うちへ行きましよう。可いい塩あん梅ばい

に誰も居ないから。」

促して、急いで脱放しの駒下駄を捜る時、白脛に緋が散った。お千も慌しなかったと見えて、宗吉の穿物までは心着かず、可恐しい処を遁げるばかりに、息せいて手を引いたのである。

魔を除け、死神を払う禁厭であろう、明神の御手洗の水を掬って、雫ばかり宗吉の頭髪を濡らしたが、

「……息災、延命、息災延命、学問、学校、心願成就。」

と、手よりも濡れた瞳を閉じて、頸白く、御堂をば伏拝み、

「一口めしあがれ、……気を静めて——私も。」

と柄杓を重げに口にした。

「動悸を御覧なさいよ、私のさ。」

その胸の轟とどろきは、今より先に知ったのである。

「秦さん、私は貴方を連れて、もうあすこへは戻らない。……身にも命にもかえてね、お手伝をしますがね、……実はね、今明神様におわびをして、貴方のお頭つむを濡らしたのは——実は、あの、一度内へ帰ってね。……この剃刀で、貴方を、そりたての今道心にして、一緒に寝ようと思つたのよ。——あのね、実はね、今夜あたり紀州のあの坊さんに、私が抱かれて、そこへ、熊沢だの甘谷だのが踏込んで、不義いたずらの罪に落そうという相談に……どうでも、と言つて乗せられたんです。

……あの坊さんは、高野山とかの、金かね高たかなお宝ものを売りに出て来ているんでしょう。どことかの大金持だの、何省の大臣だ

のに売ってやると言つて、だまして、熊沢が皆質に入れて使つてしまつて、催促される、苦しまぎれに、不断、何だか私にね、坊さんが厭味らしい目つきをするのを知つていて、まあ大それた美つつもたせ人局だわね。

私が弱いもんだから、身体からだも度胸もずばぬけて強そうな、あの人をたよりにして、こんな身裁しだらになつたけれど、……そんな相談をされてからはね……その上に、この眉毛まみえを見てからは……」

と、お千は密そつと宗吉の肩を撫でた。

「つくづく、あんな人が可厭いやになつた。——そら、どかどかど踏込むでしょう。貴方を抱いて、ちゃんと起きて、居直つて、あいそづかしをきつぱり言つて、夜中に直ぐに飛出して、溜飲りゆういんを

下げてやろうと思つたけれど……どんな発機はずみで、自棄腹やげばらの、あの
人たちの乱暴に、貴方に怪我でもさせた日にや、取返しがつかな
いから、といま胸に手を置いて、分別をしたんですよ。

さ、このままどこかへ行きましょう。私に任して安心なさいよ。
……貴方もきつとあの人たちに二度とつき合つては不可いけません。」
裏うらが崖の石段を降りる時、宗吉は狼の峠を越して、花やかな都
を見る気がした。

「……そう……」

お千さんが莞爾にっこりして、塩煎餅を買うのに、昼夜帯を抽ぬいたの
が、安ものらしい、が、萌黄もえぎの金かね入いれ。

「食べながら歩行あるきしましょう。」

「弱虫だね。」

おおどおり

大通へ抜ける暗がり、甘く、且つ香しく、皓齒でこなし

たのを、口移し……

九

宗吉が夜学から、徒士町おかちまちのとある裏の、空瓶屋と檻樓屋ぼろやの間

の、貧しい下宿屋へ帰ると、引傾ひきかしいだ濡縁ぬれえんづきの六畳から、

男が一人摺すれちが違ちがいに出て行くと、お千さんはパツと障子を開けた。

が、もう床が取つてある……

枕元の火鉢に、はかり炭を継いで、目の破れた金網を斜はすに載せて、お千さんが懐ふところ紙がみであおぎながら、豌豆餅えんどうもちを焼いてくれた。

そして熱いのを口で吹いて、嬉しそうな宗吉に、浦里の話をした。

お千は、それよりも美しく、雪はなけれど、ちらちらと散る花の、小庭の湿地しけちの、石炭殻いしぜんがらにつもる可哀あわれさ、痛々しさ。

時次郎でない、頬ほ被おかぶりしたのが、黒塀の外からヌツと覗く。

お千が脛はぎしろ白く、はつと立って、障子をしめようとする目の前へ、トンと下りると、つかつかと縁側へ。

「あれ。」

「おい、気の毒だがちよつと用事だ。」

と袖から蛇の首のように捕縄とりなわをのぞかせた。

膝をなえたように支つきながら、お千は宗吉を背後うしろに囲つて、

「……この人は……」

「いや、小僧に用はない。すぐおいで。」

「宗ちゃん、……朝の御飯はね、煮豆が買つて蓋ふたもの、……紅

にしようが生薑と……紙おおいの蔽おおいがしてありますよ。」

風俗係は草履を片手に、もう入口ふすまの襖を開けていた。

お千が穿はきものをさがすうちに、風俗係は、内から、戸の錠をあ

けたが、軒を出ると、ひたりと腰縄を打った。

細腰はふつと消えて、すぼめた肩が、くらがりの柳に浮く。

……そのお千には、もう疾とつに、羽織もなく、下着もなく、膚はだえただ白く縞しまの小袖の萎なえたるのみ。

宗吉は、跣足はだしで、めそめそ泣きながら後を追った。

目も心も真ま暗くらで、町も処も覚えぬ。颯さつと一条の冷い風が、電燈の細い光に桜を誘った時である。

「旦那。」

とお千が立停たちどまって、

「宗ちゃん——宗ちゃん。」

振向きもしないで、うなだれたのが、気を感じて、眉を優しく振向いた。

「……………」

「姉さんが、魂をあげます。」——たど辿りながら折つたのである。
 ……懐紙の、白い折鶴が掌てにあつた。

「この飛ぶ処へ、すぐおいで。」

ほつと吹く息、うすくれない薄紅に、折鶴はかえつて蒼白く、はなびら花片に

ふつと乗つて、ひらひらと空を舞つて行く。……これが落ちた大
 な門で、はたして宗吉は拾われたのであつた。

電車が上り下りともほとんど同時に来た。

宗吉は身動きもしなかつた。

と見ると、まるまげ丸鬚の女が、そのひぢりめん緋縮緬のそば傍へ衝と寄つて、い
 つか、肩ぬげつつ裏のすべ辻つたかいしよう効性のない羽織を、上から引合

せてやりながら、

「さあ、来ました。」

「自動車ですか。」

と目を睜みはつたまま、緋縮緬みはの女はきよろんとしていた。

十

年としわか若い駅員が、

「貴方がたは？」

と言った。

乗り余った黒山の群集も、三四輛立続けに來た電車が、泥まで

綺麗に浚つたのに、まだ待合所を出なかつた女二人、（別に一人）と宗吉をいぶかつたのである。

宗吉は言つた。

「この御婦人が御病氣なんです。」

と、やっぱり、けろりと仰向あおむいている緋縮緬あおむの女を、外套がいとうの肘ひじで庇かばつて言つた。

駅員の去つたあとで、

「唯ただいま今、自動車を差上げますよ。」

と宗吉は、優しく顔を覗のぞきつつ、丸鬚のぞの女に瞳を返して、

「巢鴨はお見合せを願えませんか。……きつと御介抱申します。

私わたくしはこういうものです。」

なふだに医学博士——秦宗吉とあるのを見た時、……もう一人居た、散^{さんぎり}切で被布の女が、P形に直立して、Zのごとく敬礼した。これは附添の雑仕婦^{ぞうしふ}であつたが、——博士が、その従弟の細君に似たのをよすがに、これより前^{さき}、丸鬚の女に言^{ことば}を掛けて、その人品のゆえに人をして疑わしめず、連^{つれ}は品川の某楼の女郎で、気の狂つたため巢鴨の病院に送るのだが、自動車で行きたい、それでなければ厭^{いや}だと言う。そのつもりにして、すかして電車で来ると、ここで自動車でないからと言って、何でも下りて、すねたのだと言う。……丸鬚は某楼のその娘分。女郎の本名をお千と聞^きくまで、——この雑仕婦は物頂^{ぶつちようづら}面^{にら}して睨^{にら}んでいた。

不時の回診に驚いて、ある日、その助手たち、その白衣の看護婦たちの、ばらばらと急いで、しかも、静粛に駆寄るのを、徐ろおもむに、左右に辞して、医学博士秦宗吉氏が、

「いえ、個人で見舞うのです……皆さん、どうぞ。」

やがて博士は、特等室にただ一人、膝も胸も、しどけない、けろんとした狂女に、何と……手にかみそり剃刀を持たせながら、臥床ベッドにひざまず跪いて、その胸に額を埋めて、ひしと縫すがつて、澹然さんぜんとして泣きながら、微笑ほほえみながら、身も世も忘れて愚に返つたように、だらしなく、涙を髯ひげに伝わらせていた。

大正九（一九二〇）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

売色鴨南蛮

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>